



## YUKARI NEWSLETTER ゆかり通信

since 1994

お慈悲につつまれ、足るを知る

北海道千歳市清水町1-14 鶴寶山 千正寺

TEL:0123-23-2442 FAX:0123-24-9883

第 219 号

平成 28 年 4 月

仏事の小箱 お墓編 第 3 回

### 素通りしないで

今日は彼岸の中日。本堂では彼岸会の法事が勤められています。

多くの参詣者がお寺の門をくぐってきます。でも、よく見ると、境内を直進して本堂に上がる人よりも、横に折れて本堂の裏手にある墓地に行き、それぞれのお墓にだけお参りをすませて、本堂には上がることのないままに帰ってしまう人の方が、ずっと多いのです。

そういう光景を目にするたびに、「ああ、もったいない」と、ため息が出てします。

お彼岸の期間でも他の日ではなく、ちょうど法事が勤められている日であって、これから法話が行われようとしている時間なのです。それでも本堂は素通りで、お墓だけのお参りですまされるのは本当に残念です。お盆もそうですが、お彼岸も、お墓参りさえしておれば、それで事足りると考えておられるのでしょう。

しかし、それでは事足りません。お墓の前で手を合わせて、彼岸の世界にいらっしゃる人を偲ぶのも大切ですが、この私が彼岸の世界とは何かを聞かせていただくことは、もっと大切です。お彼岸とは何かと言えば、迷いの此の岸にある私が、悟りの彼の岸に到るための仏道修行を実践する期間なのです。浄土真宗の仏道修行は、聴聞しかありません。仏さまの教えを聞くことがお彼岸の意味であり、お寺の彼岸会はそのためにおつとめされているのですから。

だから、どうぞ本堂を素通りしないでお上がりください。それこそが、ご先祖が願われていることなのでしょう。お墓には法要が終わってから、法要に遇わせていただいたお礼として、ゆっくりお参りされればいいのです。

### 先祖代々

お墓には当然、そこに遺骨が納められている人の名を刻みます。

墓石の側面に彫ることもあれば、お墓の傍らに、「法名碑」と呼ぶ屏風のような石を立てて、そこに名前を刻んでいく場所もありますが、いずれにせよ年月が経ち、名前がどんどん増えてくれば、もうそれ以上彫ることが出来なくなってしまいます。

さてどうしようかということで、よくとられている方法が、名前でいっぱいになってしまった石を取り替え。その時に、ある程度古くなってしまった人たちの名前を外し、「先祖代々」と表記することです。

最近おつとめしたお墓の例では、大正から昭和に至る十一人の名で埋められた法名碑が新しくなり、昭和の戦前までに亡くなった六人が、「先祖代々」になり、その分の空白ができました。これで当分は大丈夫だということでしょう。

まあ、こう言ってはおかしいですが、「先祖代々」とは、ある意味で便利な言葉です。

そして、先祖代々となってしまった人は、私から言えば遠い過去の人であり、意識することもほとんどない人たちなのでしょう。

でも、やっぱりお墓にお参りされた時は、「先祖代々」と記された人たちを想っていただきたいと思います。先祖代々と言いますが、ご先祖というのは、何もお墓に名前が刻まれたその人から始まるわけではありません。その前もあります。前の前もあります。その生命の流れが今、お墓の前で手を合せている私に受け継がれているのです。

普段は忘れていることですが、私の背後に無限のいのちがあると気づくとき、「先祖代々」という言葉は輝きだします。

本文：菅純和「続 仏事の小箱」より

